

う うるさい人の声に耳を傾ける

これまでも住民をはじめとして様々な関係者の合意形成を目的とした話し合いの企画・運営をたのまれることが多かった。合意形成といっても行政の目論見があらかじめ決まっていて、それに誘導するという類ではない。課題を確認し具体的な方向性を検討する中で住民や関係者の合意点を探る作業だ。

丁寧な時間をかけながら大きな方向性が見えかけて来た時にかぎって、反対の意見を出される方がいる。大方は「困った人」「うるさい人」とレッテルを貼って、まわりがその意見に左右されないように、できればその意見を封印したいと思われるかもしれない。ただ、その時こそ慎重に考えなければならぬと思うのだ。

方向性が見えかけたその時にかぎって反対意見を出されるというのは変な言い方に聞こえるかもしれないのだが、具体的な方向性が見えてくると本当にそれで良いのかという考えが生まれるのは素直なことだと思う。合意形成が「関心↓理解↓納得↓合意」と段階的に進むとして、逆に「関心↓疑問↓不審↓異議」という流れも生じうる。発言の内容を何度も振り返り、どこに疑問があるのか、疑問に答えず不審を増幅させてしまっていないか。これまでのプロセスを冷静に振り返る必要がある。

話し合いの結果見えて来た方向性といっても、その方向性が唯一無二で非の打ち所がないということにはならない。疑問や不審点にこそ、さらに良い方向性を見出す手がかりがあるかもしれない。異なる意見であってもその根本にある課題意識は共有できることが多い。その上で生じる異なる意見には、それぞれに一理があることも多い。異なる意見からこれまで気がつかなかった問題点が浮かび上がり、そこから新たな誰もが納得するより良い方向性を見つけ出すこともある。プランナーの力量が問われるところだ。

合意形成を目的とした話し合いであっても、決して白か黒かを多数決で決めるということではない。住民や関係者の合意点を探るために「うるさい人の声に耳を傾ける」という姿勢を常に持ち続け、より良い方向性を見出す努力をしていく必要がある。